

日本語母語話者のためのスペイン語点過去と線過去の教授法をめぐって

山村, ひろみ
九州大学大学院言語文化研究院

<https://doi.org/10.15017/9459>

出版情報：言語文化論究. 23, pp.69-88, 2008-02-28. 九州大学大学院言語文化研究院
バージョン：
権利関係：

日本語母語話者のためのスペイン語点過去と線過去の教授法をめぐって*

山 村 ひろみ

0. はじめに

21世紀を迎え、スペイン、中南米諸国を中心とするスペイン語圏世界は政治・経済の分野のみならず広く社会・文化的分野においてもその比重を増しており、このスペイン語圏世界と日本との関係はかつてないほど密接なものとなっている。これを裏付けるように、日本におけるスペイン語学習者数は増加の一途をたどっているが、このスペイン語教育の基礎となるべきスペイン語文法教育はいまだ開発途上にあると言わざるをえない。確かに、スペイン語文法教育に不可欠なスペイン語と日本語の対照研究はこれまでも国立国語研究所を中心として実施されてきた¹。また、日本のスペイン語研究者の中には、日本語との対照という観点から実り多い成果をあげている者も少なくない²。しかしながら、スペイン語教育の中でも文法教育の研究はまだ歴史が浅く、ほとんど手のつけられていない項目が残されているのも事実で、そのひとつが本稿が扱う時制である³。

スペイン語の時制が日本語母語話者にとって学習上の困難のひとつとなっているということは、スペイン語教授に携わるものにとっては日々実感するところである。その原因としては様々な要因が考えられるが、まず第一は、スペイン語の動詞活用形の形態的複雑さにあると思われる。それは、日本におけるスペイン語学習者にとって最も身近な外国語である英語と比較してみれば、一目瞭然である。例えば、英語とスペイン語の双方において規則活用の動詞とみなされている「勉強する」を意味する動詞の現在形と過去形を比べてみよう。英語の場合、「勉強する」という動詞 study の現在形には、主語が3人称単数の場合の studies とそれ以外の場合の study の2形式しかなく、過去形については主語の如何に拘らず studied の1形式しかない。一方、スペイン語の「勉強する」 estudiar の現在形は、主語の人称3種類および単複の2種類に従って、合計6つの形式を持つ⁴。また、過去形については、点過去形と線過去形の2種類があり、そのそれぞれが現在形と同様に6つの活用形式を持つため、合計12の形式が存在することになる⁵。このようなスペイン語の動詞活用の複雑さは、スペイン語の初心者にとっては大変な負担であり戸惑いを覚える者も多い。とはいえ、学習者が動詞活用形の習得の際に感じる困難さは、スペイン語に触れる時間が増えるにつれ克服されていく。彼らはそれぞれの仕方ですペイン語の込み入った活用形の習得方法を身につけていくからである。それに対して、スペイン語の時制形式の機能的な面の習得は必ずしも学習時間の多さに比例しない。つまり、時制の正しい使い方は、長年スペイン語を学習している人にとっても身につけることが難しいのである。中でも、直説法点過去と線過去の使い分けは、日本語を母語とするスペイン語学習者にとっては習得するのが極めて困難な時制という点で、スペイン語教師の意見は一致する⁶。これにも様々な原因が考えられようが、そのひとつとして、従来のスペイン語文法教育が、点過去と線過去の理解に不可欠な当該二時制間にある機能的差異の妥当かつ明解な説明、また、日本人学習者にとって有効な説明を提示してこなかったことがあげられよう。本稿は、この

ような状況を踏まえながら、日本語を母語とするスペイン語学習者に対して点過去と線過去の、特に、機能的側面を説明する際に直面する問題を少しでも克服するためにはどうすればよいか、また、日本語を母語とするスペイン語学習者に対する効果的な点過去と線過去の説明とはどうあるべきかを、ここ10年間に日本で出版されたスペイン語教科書における当該二形式の記述内容を調査・検討しながら、具体的に提示していくものである。

以下、第一章では、問題となるスペイン語の直説法点過去と線過去の一般的な見解を示した後、これらの時制が主に大学の第二外国語として出版されたスペイン語の教科書の中でどのように説明されているかを概観する。続く第二章では、第一章で見た点過去と線過去の機能的差異に関する従来の説明の問題点を指摘する。さらに第三章では、前章で指摘された点過去と線過去の説明に関する問題点を改善するための方策のひとつとして、新たに「出来事」と「状況」という用語を用いた説明および実際の授業におけるその導入の仕方を提案する。そして第四章では、それまでの議論をまとめると同時に残された課題について触れる。

1. 点過去と線過去はどのように説明されているか

1.1. 点過去と線過去の一般的な見解

本章では、ここ10年に主に大学の第二外国語用として出版されたスペイン語教科書の中で点過去と線過去がどのように記述また説明されてきたかを見るが、その前にスペイン語の点過去と線過去とはどういうものかを、まず Vendler の動詞の4分類に従いながら、また、各時制形式の典型的用法をあげるにより確認しておきたい。

スペイン語の点過去と線過去は原則的にすべての動詞に適用される時制形式である⁷。以下を参照されたい。

- (1) a. María fue (ps.) guapa. マリアは美しかった。
b. María era (imp.) guapa.⁸ マリアは美しかった。
- (2) a. María estudió (ps.) japonés. マリアは日本語を勉強した。
b. María estudiaba (imp.) japonés. マリアは日本語を勉強していた。
- (3) a. María escribió (ps.) una carta. マリアは一通手紙を書いた。
b. María escribía (imp.) una carta. マリアは一通手紙を書いていた（書きつつあった）。
- (4) a. María llegó (ps.) a la estación. マリアは駅に着いた。
b. María llegaba (imp.) a la estación. マリアは駅に着きつつあった。

(1) は Vendler の4分類のうち state に相当する動詞 ser 「英語の be 動詞に相当する繫辞動詞」、(2) は activity に相当する動詞 estudiar 「勉強する」、(3) は accomplishment に相当する動詞 escribir 「書く」、そして (4) は achievement に相当する動詞 llegar 「着く」の点過去と線過去による表出である。これらの例から分かるように、点過去と線過去は動詞の時間的構造の如何に拘らず、原則としてすべての動詞に適用される。

次に、点過去と線過去に関する最も一般的な見解を確認しておく。後述するように、各時制のどのような用法をその典型とするかについては研究者また教科書の著者間で意見が分かれる。従って、以下に示す見解は、スペイン語の点過去と線過去の違いを説明するために最も一般的に言及されるものに過ぎないことを断っておきたい。まず、以下の例を参照されたい。

- (5) a. María escribió (ps.) una carta. マリアは一通手紙を書いた。
 b. María escribía (imp.) una carta. マリアは一通手紙を書いていた（書きつつあった）。
- (6) a. María llegó (ps.) a la estación. マリアは駅に着いた。
 b. María llegaba (imp.) a la estación. マリアは駅に着きつつあった。
- (7) a. Juan amó (ps.) a Salomé durante varios años.
 フアンはサロメを数年間愛した。
 b. *Juan amaba (imp.) a Salomé durante varios años. (García Fernández 1998:29)
 フアンはサロメを数年間愛していた。
- (8) a. Aquella tarde María bailó (ps.) valeses durante dos horas.
 あの午後マリアは2時間ワルツを踊った。
 b. *Aquella tarde María bailaba (imp.) valeses durante dos horas. (Ibid.)
 あの午後マリアは2時間ワルツを踊っていた。

点過去と線過去の機能的差異を説明するにあたり一般的にもっとも流布している見解は「両者はアスペクトにおいて対立する」というものである。すなわち、点過去は当該事態が「完了」したことを示すのに対し、線過去は当該事態が「不完了」であることを示すという考えである。上記の例のうち、(5) (6) はそれぞれ accomplishment と achievement の動詞の点過去と線過去による表出であるが、このような telic な動詞の点過去は、確かに、当該動詞が示す事態の「完了」を、また、線過去はその「不完了」を示す。一方、(7) は activity、(8) は state の点過去と線過去による表出であるが、このような atelic な動詞の点過去は、当該事態が時間的に限定されていることを示すが、線過去はそのような時間的限定には関与しない。先行研究の多くは、当該事態の「完了」と当該事態の「終了」を同じものとして扱っているので、そのような観点からすれば、atelic な動詞の点過去が示す時間的限定性も「完了」と見なすことができよう。

次に、点過去と線過去の用法上の違いとして言及されることが多い「過去の習慣」について見てみよう。

- (9) De joven mi padre fumaba (imp.) mucho, pero ahora no.
 若い頃、私の父はずいぶん喫煙していたが、今はそうではない。
- (10) De joven María bailaba (imp.) valeses durante dos horas todos los días.
 若い頃、マリアは毎日2時間ワルツを踊っていた。

(9) (10) の例が示すように、「過去の習慣」、特に、現在の習慣と対照させながら過去の習慣を示す場合には線過去が使用されることが多い。これは記述的な事実として広く認められたことであり、その意味で点過去と線過去の違いを示す典型例としてあげることができる⁹。

さらに、特に、点過去と線過去の機能的差異をそれらが示す「時間関係」から捉えようとする先行研究においては、次に示すように、線過去と現在時制との並行性が指摘されることが多い。

- (11) a. María dijo: “Tengo (現在) hambre.” マリアは「お腹がすいてるの」と言った。
 a'. María dijo que tenía (imp.)/*tuvo (ps.) hambre.

(11a) は主動詞が点過去で従属動詞が現在時制の直接話法文である。この文を対応する間接話法文に転換すると、(11a') のように、従属動詞の現在時制は必ず線過去に転換され、点過去になることはない。このことから、スペイン語の線過去はいわゆる時制の一致に関与する時制として扱われ、しばしば「過去における現在」と呼ばれる。

以上、点過去と線過去の機能的違いの説明として、「完了性」の表出の有無、「過去の習慣」の表出の有無、さらに線過去と現在時制との並行性に関わるものを見た。これらはどれもスペイン語の点過去と線過去の機能的差異に言及する際に指摘される項目であり、その理論的解釈がどうであれ¹⁰、当該二形式に関わる言語事実として考慮すべきものだと考えられる。

1.2. 最近10年間に出版されたスペイン語教科書に見られる点過去・線過去の説明

本節では、最近10年間に主に大学の第二外国語用として出版されたスペイン語教科書の中で、点過去と線過去がどのように説明されているのかを調査した結果を述べる。対象としたのは1997年から2007年の間に日本で出版されたスペイン語教科書39冊で、方法としては、その中で点過去と線過去の用法説明として用いられたキーワードが何であるかをチェックし、まとめた¹¹。その結果は表1のとおりである。

表1. 39冊の教科書に見られる点過去・線過去の説明のためのキーワード

| | 点 過 去 | 線 過 去 |
|---|--|--|
| A | 完結 7/39 完了 8/39 終了(終結) 8/39 終わった 3/39 一定期間(閉じた) 3/39 | 継続(持続) 23/39 不完了 4/39 未完了(完結していない) 5/39 不定(開いた・展開) 3/39 |
| B | した 9/39 だった 3/39 していた 1/39 | していた 15/39 した 1/39 だった 2/39 したものだ[だった] 9/39 |
| C | 出来事 7/39 行為 12/39 状態 8/39 事柄 6/39 | 出来事 3/39 行為 15/39 状態 19/39 状況 6/39 |
| D | 副詞との共起(10時まで、10年間、昨日等) 4/39 | 副詞との共起(当時、あの頃、しばしば、よく等) 1/39 |
| E | | 習慣 22/39 反復(繰り返し) 20/39 時制の一致(過去における現在等) 18/39 丁寧(婉曲) 5/39 |
| F | 説明なし 4/39 | |

表1のうち、Aは点過去と線過去の機能的差異を両者間に設定される「アスペクト」対立を基に説明しようとした教科書の数、Bは点過去と線過去の違いを対応する日本語の形式によって説明し

ようとしたものの数、Cは点過去と線過去を「出来事」「状態」「状況」といった用語で説明しようとしたものの数、Dは点過去と線過去がどのような副詞句と共起しやすいかを基に両者の違いを示そうとした教科書の数、Eは線過去に特有な用法を別立てにし、線過去の特徴を示した教科書の数、そしてFは点過去については規則活用と不規則活用といった形式的な面に触れているだけで、その機能的な面の説明には一切触れなかった教科書の数である¹²。この表1の結果からは、以下のことが読み取れる。

まず、全体的に見ると、その用法に関する情報量としては、点過去よりも線過去の方が多い。これは、例えば、Fの結果が示すように、教科書の中には、点過去の用法については何も言及しないものがあつたことから明らかである。他方、線過去を見ると、点過去とは逆に、「習慣・反復」といった一般的に線過去に特有の用法と見なされているもののほかに、「丁寧（婉曲）」といったいわば周辺的ともいえる用法にまで触れた教科書がある。このような点過去と線過去の用法に関する記述の量の違いが、当該二形式を習得する学習者にどのような影響を与えるかは今のところ不明である。しかし、過去に点過去と線過去の二つの形式があるという点がスペイン語の時制の大きな特徴であることを考慮するならば、そのうちのどちらか一方の説明しかないというのは問題ではなからうか。

次に、説明のために用いられたキーワードの数からするならば、現在の日本においても、点過去と線過去の違いは前節で述べた「完了性」「過去の習慣」の表示の有無、また、線過去については「時制の一致」との関連という観点から説明されることが多いということが分かる。このような観点からの説明の妥当性については後で詳しく述べたい。

また、日本語を母語とするスペイン語学習者のために特に導入されたと思われるものが、点過去に対する「た」、線過去に対する「していた」というキーワードである。このように点過去あるいは線過去に対応するように見える日本語が教科書に具体的に記載されているというのは、スペイン語の初心者にとってはとりわけ大きな助けとなるだろう。しかし、スペイン語の点過去は常に日本語の「た」に、またスペイン語の線過去は常に「日本語の「していた」」に対応するのだろうか。もしスペイン語の過去のあり方と日本語のそれとの間にズレがあるとしたら、このような比較対照は却って学習者の間に混乱を引き起こすことになろう。

さらに、線過去には上述した「時制の一致（過去における現在等）」のほか「丁寧（婉曲）」といった同形式独自のキーワードが用いられているが、このような線過去に対する説明の仕方は点過去との関係からどのような妥当性があるのだろうか。次節では、表1のキーワードのうち特に頻度数の高かった、点過去と線過去の違いを「完了性」の表出の有無という観点から説明する立場（2.1）、「過去の習慣」の表出の有無という観点から説明する立場（2.2）、各時制に対応する日本語の形式から説明しようとする立場（2.3）、さらに共起する副詞句の種類から説明しようとする立場（2.4）のそれぞれにどれだけの有効性があるかを具体的に検証していく。

2. 従来の説明の仕方の検証

2.1. 完結・終結・完了 vs. 継続・不完了・未完了

まず、調査した39冊の教科書の中で出現頻度が高く、点過去と線過去の違いを明瞭に表していると判断される「完了性」の表出の有無、いわゆるアスペクト対立に基づく説明の妥当性について検証してみる。

前章でも指摘したように、「点過去と線過去の機能的差異はアスペクト対立に基づく」とする説は、点過去は当該事態の「完了」を示すが線過去はそれには関与しないと主張するが、その根拠は

以下に示す当該二形式の時間的限定を示す副詞句との共起の可否にある。

- (12) (= (7)) a. Juan amó (ps.) a Salomé durante varios años.
フアンはサロメを数年間愛した。
b. *Juan amaba (imp.) a Salomé durante varios años. (García Fernández 1998:29)
フアンはサロメを数年間愛していた。
- (13) (= (8)) a. Aquella tarde María bailó (ps.) vales durante dos horas.
あの午後マリアは2時間ワルツを踊った。
b. *Aquella tarde María bailaba (imp.) vales durante dos horas. (Ibid.)
あの午後マリアは2時間ワルツを踊っていた。

つまり、点過去と線過去を「完了性」の表出をめぐるアスペクト対立と考えるならば、点過去は「完了」、すなわち、当該事態が時間的に限定されることを示すのであるから、(12a) (13a) が示すように、時間的限定を示す副詞句と共起することが可能だが、線過去はそのような時間的限定には関与しない、換言すれば、線過去は点過去とは逆に、当該事態が時間的限定を受けずに「継続」することを示すのだから、(12b) (13b) が示すように、時間的限定を示す副詞句とは共起しない、ということになるのである。このような考え方は、確かに、上記の例に見られる点過去と線過去の違いを正しく捉えたものであり、それ故、これまで点過去と線過去の機能的差異を説明するための一般原則ともなってきたのだと思われる。しかしながら、点過去と線過去の実態を観察してみると、このアスペクトに基づく説明とは相容れないように見える例がある。以下を参照されたい。

- (14) a. ?Durante tres años él vivía (imp.) en Madrid.
3年間彼はマドリーに住んでいた。
a'. Durante los tres años de la guerra él vivía (imp.) en Madrid. (山村 1999:14)
その戦争の3年間彼はマドリーに住んでいた。
b. Hasta hace poco vivieron (ps.)/vivían (imp.) en Pamplona. (Westfall 1995:230)
少し前まで彼らはパンプローナに住んでいた。
c. Hasta hace seis meses, Yong-Chu Hu estudiaba (imp.) Letras en su país: China. Lo dejó para venir a España en compañía de su hermana y su madre. (Cambio16 1220:60)
6ヶ月前まで Yong-Chu Hu は祖国中国で文学を勉強していた。彼はそれを妹と母とともにスペインへやって来るために放棄した。
d. Desde aquel día fueron (ps.) enemigos. (Guitart 1978:152)
あの日から彼らは敵同士だった。

(14a) と (14b) はどちらも「3年間」という時間限定の副詞句との共起を問題にしたものであるが、「3年間」が裸の名詞句の *durante tres años* で示された場合には線過去との共起がかなり難しいのに対し、「その戦争の3年間」 *durante los tres años de la guerra* のように、時間限定を示す名詞句が特定化されると、線過去との共起は容易になる。また、(14b) (14c) では *hasta hace poco* 「少し前まで」、*hasta hace seis meses* 「6ヶ月前まで」のように、時間軸上の右側の

限界、すなわち、終了限界を明示する副詞句と線過去とが何の問題もなく共起している。さらに、(14d)では、点過去が時間軸上の左側の限界、すなわち、開始限界を示す副詞句と共起しているため、当該の点過去は事態の終結ではなく開始を示すことになっている。以上、(14)にあげた例はどれも「線過去は時間的限定に関与しない」あるいは「点過去は当該事態の時間的限定を示す」という説明とは矛盾するように見える。また、点過去と線過去の違いを時間的限定性の表出をめぐる対立とする見解は、次に見るような例もうまく説明できない。

- (15) a. ¿ Sois felices ? --- Lo éramos (imp.). (Pero ya no lo somos.) (Sándor 2006:51)
あなたたち幸せ?--- [幸せ] だった。(私たちはもうそうではない。)
- b. ¿ Por qué no asististe ayer a las clases ? ---Porque estaba (imp.) enfermo. (Pero ya no lo estoy.) (Ibid.)
あんたなぜ昨日授業でなかったの?---だって病気だったから。(でももう病気ではない。)
- c. Pedro era (imp.) rubio de pequeño. (Arche 2006:2)
ペドロはこどもの頃金髪だった。
- d. Pedro era (imp.) esquimal. (Ibid.) (Pedro, que ya no vive, era esquimal.) (Ibid.)
ペドロはエスキモーだった。(ペドロは、もう生きていないのだが、エスキモーだった。)
- e. Cuando yo *fui (ps.)/era (imp.) pequeña,...
私がこどもだったとき、...

(15)の例はすべて発話時において有効ではない事態、言い換えるならば、時間的に限定された事態が線過去によって表出されたものである。もし線過去が時間的限定に関与せず、当該事態の継続を示す動詞形式だとするならば、上記のような文は出現しないはずである。しかし、実際の言語現象は以上のとおりなのである。点過去は時間的限定のある事態を示し、線過去はそうでない事態を示す、という説明を受けた学習者にとって、(15e)はとりわけ間違いやすい表現ではなかるうか。大人になってから子供時代を振り返るという状況において、その過ぎ去った子供時代を線過去で表出するというのは、点過去と線過去の違いをあくまで時間的限定性の有無と理解している限り、想像しにくいと思われるからである¹³。

以上、点過去と線過去の機能的差異を「完了」対「継続」、「時間的限定性の有無」という用語を用いながら説明する際の長所と短所を見た。確かに、点過去と線過去の違いを「完了性の表出の有無」「時間的限定性の有無」というキーワードで説明することはスペイン語の言語事実のかなりの部分を正しく把握することに繋がるであろう。しかしながら、それが点過去と線過去の実態、特に、スペイン語の初心者が用いるであろう基本的表現の振る舞いに対して有効でない場合がある、というのは問題だと考える。

2.2. 「過去の習慣」の表出の有無

前章でも見たように、点過去と線過去の機能的差異を学習者に説明する際のキーワードとして「過去の習慣」の表出について触れる教科書は大変多い。このとき重要なのは、そのような教科書のほとんどが、「過去の習慣」を表すのは線過去である、あるいは、線過去は「過去の習慣」を表す、といった表現をしている点である。教科書におけるこのような記述は、学習者の間にとすれば点過去は「過去の習慣」を示すことができない、点過去は一回限りの事態しか表出できない、と

いった誤った理解を生みがちである。以下の例を参照されたい。

- (16) a. El año pasado iba (imp.) a nadar todos los días.
 去年私は毎日泳ぎに行った。
 b. El año pasado fui (ps.) a nadar todos los días. (Doiz-Bienzobas 1995:107)
 去年私は毎日泳ぎに行った。

通常、線過去の「過去の習慣」用法が説明される際には、例文に「習慣」であることを明示する todos los días「毎日」、siempre「いつも」といった副詞が付加されていることが多い。しかし、このような副詞は(16)の例に明らかなように、必ずしも「過去の習慣」を示す線過去としか共起しないわけではない。それらは点過去とも問題なく共起が可能である。だとすると、線過去で表出された「過去の習慣」的事態(16a)と点過去で表出されたそれ(16b)との違いはどのような点にあるのだろうか。このことについて、(16)の例をあげた Doiz-Bienzobas (1995) は次のように述べている。

“The event of swimming is repeated both in (3a)[=(16a)] and (3b)[=(16b)]. However, when the imperfect is used, the event is perceived as customary, as habitual (3a): with the preterite, it is only perceived as an iteration where no habituality is involved (3b).” (Ibid.)

上記によれば、線過去は当該事態が過去の「習慣」であることを示すが、点過去はそれが単に過去の「反復」であることを示すに過ぎないということになる。しかし、それでは当該事態の「習慣」と「反復」の違いとは何なのか。この点について、Doiz-Bienzobas (1995) は次のように続けている。

“The difference between the habitual reading and the repetitive reading as in (3a) [= (16a)] and (3b) [= (16b)] is reflected by two facts. First, (...) the sentence with the imperfect (3a) has the implicature that habit does not continue in the present; the sentence with the preterit (3b), a non-habitual repetitive does not evoke any implicature of any kind. Second, under the habitual reading, failure of an event instance to take place at one particular point in time does not invalidate the notion of habituality. Thus, in (3a), whether the subject did not go swimming one day does not prevent the speaker from categorizing the sequence of events as designating a habitual relationship. With repetitives, the situation must take place at all the various points in time as stated in the predicate: e.g. in (3b) with the preterite, there is the understanding that I did actually go swimming every single day last year.” (Doiz-Bienzobas 1995: 107-108 下線は引用者。)

Doiz-Bienzobas (1995) によれば、過去の「習慣」と「反復」の違いは次の二点である。まず第一は、過去の「習慣」を示す線過去は当該事態が発話時において継続していないことを含意するが、過去の「反復」を示す点過去にはそのような含意はない。第二は、過去の「習慣」を示す線過去の文においては、todos los días「毎日」という副詞が共起していても、当該事態が文字通り「毎日」生起している必要はないが、過去の「反復」を示す点過去の文においては、todos los días

「毎日」という副詞と共に起している限り、当該事態は必ず「毎日」生起していなければならない。

このうち第一点は、前節で見た「時間的限定性の有無」という観点から興味深いものである。なぜなら、「時間的限定性の有無」という観点からの説明では、線過去は当該事態の「時間的限定性」に関与せずその「継続」を示すものと定義されたのに対し、「過去の習慣」という観点からの説明では、この線過去の「時間的限定性」の非関与がキャンセルされ、逆に、当該事態が発話時において無効であることが含意されることになるからである。これまでの教科書では、点過去と線過去における「時間的限定性の有無」と「過去の習慣」の表出の有無は互いに無関係なものとして説明されるのが常であったが、改めてこの二つの用法の意味する、あるいは、含意するところを考えると、両用法間にある機能的相互関係は検討の余地があると思われる。

次の第二点は、換言すれば、線過去の表出する過去の事態の「習慣」はいわばポテンシャルな性質を持つものであるが、点過去の表出する過去の事態の「反復」はアクチュアルなものだと言うことになろう。これをさらに言い換えるならば、線過去の示す過去の「習慣」では当該事態が指示する対象の「属性」が問題になるのに対し、点過去の示す過去の「反復」では当該事態の「生起」そのものが問題になるということである。

以上、「過去の習慣」をめぐる点過去と線過去の振る舞いの違いを見たが、ここで明らかになった点は、従来の教科書ではほとんど指摘されていない。これからは、まず、「過去の習慣」は線過去のみならず点過去でも表出可能であること、そして、同じ習慣的事態でも、線過去で表出する場合は指示対象の「属性」という面に焦点があたり、点過去で表出する場合には当該事態の「反復的生起」そのものに焦点があたることを強調すべきと思われる。

2.3. 日本語の対応形式：「した」vs.「していた」

日本で出版される教科書に特有の説明の仕方として、スペイン語の点過去と線過去に対応する日本語の形式を援用するというものがある。前章の表1によれば、具体的には点過去は日本語の「した」に、また、線過去は日本語の「していた」に対応すると記述した教科書が多い。日本語の「した」と「していた」が一般的に時間的限定性の有無に基づく過去の「完成相」対「継続相」というアスペクト対立と捉えられていることを考慮するならば¹⁴、これらの形式をスペイン語の点過去と線過去の説明に用いるということは、スペイン語の対応形式も同様に解釈できると理解していることになろう。しかし、2.1.、2.2.で見たように、スペイン語の点過去と線過去の違いを時間的限定性の有無で説明することには問題があった。ならば、その問題はこれら二形式を日本語の「した」対「していた」で説明する際にも確認されると推察されるが、以下に述べるように、実際その予想は正しい。以下の例を参照されたい。

- (17) a. 私は3年間スペインに住みました。 Yo viví (ps.) tres años en España.
 b. 私は3年間スペインに住んでいました。 *Yo vivía (imp.) tres años en España.
 Yo viví (ps.) tres años en España.
- (18) 私は彼女とおしゃべりしていました。 Yo estuve (ps.) charlando con ella.
 Yo estaba (imp.) charlando con ella.
- (19) 私が駅に着いたとき、列車は出発していた。
 Cuando llegué a la estación, el tren ya había salido (過去完了).

まず、スペイン語の点過去と線過去の違いを日本語の「した」と「していた」という対応形式で

説明する際の第一の問題は、(17)の例に見られるように、日本語の「していた」は時間的限定性のある(何の修飾もない)裸の副詞句と共起可能なのに対し、この「していた」に対応するとされるスペイン語の線過去は2.1でも確認したように、時間的限定性のある裸の副詞句とは共起できない点にある。従って、単に日本語の「していた」はスペイン語の線過去と対応すると説明すると、学習者は(17b)のように点過去を使用しなければならない場面で線過去を使用してしまう可能性がある¹⁵。

また、線過去が日本語の「していた」に対応するという説明は、(18)(19)が示すようなスペイン語の用法から学習者の注意を逸らしてしまう可能性もある。(18)で問題になるのは、日本語の「していた」はスペイン語の線過去のみならず、いわゆる過去の進行形の形式とも対応しうるといふ点である。しかも、estar+gerundio(現在分詞)という迂言形式に基づくこの過去の進行形は点過去と線過去の両方の形式によって表出可能なことから、問題はさらに複雑になる。つまり、スペイン語の線過去は日本語の「していた」に対応すると習った学習者は、安易に線過去は英語の過去進行形のようなものと誤解するのみならず、英語の過去進行形は「継続」を示すことから、スペイン語の過去進行形は線過去でしか表出されないといった二重の間違いを犯す可能性があるのである¹⁶。一方、(19)は、日本語の「していた」とスペイン語の過去完了との対応関係を示したものである。周知のとおり、日本語の「している/していた」は、前接する動詞が「変化」を示す場合、当該事態の結果状態を表わす。実際、(19)の「列車は出発していた」における「出発していた」は「出発する」という事態の過去における結果状態を示したものであるが、このような場合、スペイン語では線過去ではなく過去完了が使用される。しかし、もし学習者が日本語の「していた」は線過去に対応すると思いついていたら、当該事態の過去における結果状態を示すために用いられた日本語の「していた」も間違えて線過去で表出される可能性がある。

さらに、日本語の「した」と「していた」の対立をスペイン語の点過去と線過去に対応させる際の問題としては、次の例が示すように、日本語には名詞述語文のように「した」の一形式しか認めないものがある、という点をあげることができる。

- (20) 家に着いたとき、もう夜だった。 Cuando llegué a casa, ya era (imp.)/*fue (ps.) de noche.
- (21) 映画どうだった? ---最高だった。 ¿Qué tal la película? --- *Era (imp.)/ Fue (ps.) fenomenal.
- (22) 東京に着くと、いい天気だった。 Cuando llegué a Tokio, hacía (imp.)/*hizo (ps.) buen tiempo.
- (23) 今日は大変な雨降りだが、昨日はいい天気だった。
Hoy llueve mucho, pero ayer *hacía (imp.)/hizo (ps.) buen tiempo.

(20)から(23)の日本語文に出現した名詞述語文は「だった」という形式しか取ることができない。然るに、対応するスペイン語の形式を見ると線過去((20)(22))と点過去((21)(23))の両方が出現している。しかも、この線過去と点過去は当該文脈ではもう一方の時制に置換することができない。このように対応する日本語文に「した」形しかない場合、スペイン語の点過去は日本語の「した」に、また、線過去は日本語の「していた」に対応するという説明を受けた学習者は、何の斟酌もせず点過去を使い続けるか、逆に、頭を抱えてしまうかのどちらかになってしまうのではないだろうか。

以上、スペイン語の点過去と線過去の違いを日本語の「した」と「していた」を援用することにより説明する方法を見た。その結果、スペイン語の点過去と線過去は必ずしも日本語の「した」と「していた」に対応するわけではない、そして、日本語の「していた」は線過去以外の時制にも対応する、さらに、日本語の名詞述語文は「した」形式によってしか表出されない、という事実が指摘された。これらの事実はどれも点過去と線過去の機能的差異を日本語の「した」と「していた」の違いに還元することの難しさを示唆するものである。

2.4. 副詞句との共起

現在出版されているスペイン語の教科書の中には、点過去と線過去の違いを説明するにあたり、各時制と共起しやすい副詞句をあげるものもある。それらの多くは、先に見た当該二形式の違いを「完了性」の表出の有無や「過去の習慣」の表出の有無で説明しようとするものと相関している。例えば、点過去と線過去の機能的差異を「完了性」の表出の有無という観点から説明しようとする教科書は、特に、点過去と「完了性」の表出の相関関係を明示するために、例えば、時間的限定性を表す *durante tres años* 「3年間」、*hasta las diez* 「10時まで」、*ayer* 「昨日」といった副詞句と同形式の共起を強調し、他方、当該二形式の違いを「過去の習慣」の表出という観点から説明しようとする教科書は、線過去と *todos los días* 「毎日」といった頻度を示す副詞句との共起、また、同形式と *en aquellos tiempos* 「あの当時」、*en aquel entonces* 「あの頃」といった「習慣」という概念となじみやすい比較的広範な過去のインターバルを示す副詞句との共起を強調する。しかしながら、2.1.、2.2.で見たように、点過去と線過去の機能的差異は必ずしも「時間的限定性」の表出の有無や「過去の習慣」の表出の有無には還元されない。従って、これら二形式の違いを説明するために共起する可能性の高い副詞句を過度に強調することは避けるべきだと考える。

2.5. まとめ

以上、本章では、まず、ここ10年の間に日本で出版されたスペイン語教科書の中で点過去と線過去がどのように説明されているかを見た。そしてその後、調査した教科書の中で特に出現頻度の高かったキーワードごとに、その有効性と問題点を検証していった。その結果、現在の日本のスペイン語教科書の中で頻繁に目にする、点過去と線過去の機能的差異を当該事態の「完了性」の表出の有無という観点から説明しようとする立場、「過去の習慣」の表出の有無という観点から説明しようとする立場、日本語の「した」「していた」との対応関係という観点から説明しようとする立場のどれも、その妥当性という点からは問題があることが分かった。次章では、この結果を踏まえながら、これまでの点過去と線過去の説明に取って代わるものとして、過去における「出来事」か「状況」かをキーワードにした新たな説明方法を提示する。

3. 点過去と線過去に対する新しい説明方法：過去における「出来事」と「状況」

本章では、前章で見た従来の説明方法の問題点を踏まえ、新たに点過去は過去における「出来事」を示し、線過去は過去における「状況」を示すという説明を提案する。以下では、まず本稿が考える過去における「出来事」と「状況」とは何かを解説し、次に、この新しい説明の導入の仕方を具体的に示す。そして、最後に、この「出来事」と「状況」に基づく説明が点過去と線過去の様々な用法に対しどのように応用されるのかを示す。

3.1. 過去における「出来事」と「状況」

本稿が提案する「点過去は過去における「出来事」を示し、線過去は過去における「状況」を示す」という考えは山村（1996）の主張に基づくものである。山村（1996）に従うならば、点過去はO-V、また、線過去はPoVという公式で表される機能を持つ。

点過去のO-Vは「発話時に対する前時性」を示すが、この公式はさらにO(～P&P)と書き換えられる。このO(～P&P)は「発話時(O)以前における当該事態の未成立(～P)から成立(P)への変化」を意味するが、これは、換言すれば、点過去は当該事態が発話時以前に成立したこと、そのみを示すことを表したものである。なお、この公式によれば、点過去は発話時をその基準時とすることになるが、これは点過去が直示的な時の副詞句としか共起しえないことを説明するものである¹⁷。また、O(～P&P)は当該事態の成立にのみ言及し、その開始や終了には直接関与しない。山村（1996）によれば、当該事態の開始や終了は点過去のO(～P&P)という機能ではなく、この機能が適応される事態(命題)の時間構造自体に依拠するものだからである¹⁸。さらに、O(～P&P)という公式は、2.2.で見た点過去が示す当該事態の「過去の反復的生起」をうまく説明することができる。すなわち、点過去は当該事態の「生起」そのものを表出するので、その点過去が todos los días「毎日」のような反復を意味する副詞句と共起すれば、それは必然的に当該事態の反復的生起を示すことになるのである。

一方、線過去のPoVは「既定の過去時(P)に対する同時性」を意味するが、これは現在時制のOoV「発話時に対する同時性」という機能と並行関係にある。つまり、線過去と現在時制はoVが示す「同時性」という時間関係を共有し、両者の違いはただその時間関係が設定される基準時の違いにあるだけなのである。これは簡単に言えば、線過去は、現在時制が発話時空間の「状況」を示すのと同じように、既定の過去の時空間の「状況」を示す、ということになる。線過去の機能をこのように規定すれば、先に見た「過去における継続」「過去の(ポテンシャルな)習慣」「過去における指示対象の属性」「過去における現在」といった線過去の諸用法はすべて、現在時制の基準時が発話時から既定の過去時にシフトした結果と考えることができる。また、点過去とは逆に、線過去が直示的な時の副詞句のみならず非直示的なそれとも共起するもの、その基準時がOの示す「発話時」ではなくPが示す「既定の過去時」にあるから、と説明されることになる。

以上、本稿が提案する点過去と線過去の新しい説明方法の根幹をなす過去の「出来事」と過去の「状況」の意味するところを見た。次節では、この新しい説明の具体的導入方法を見ていく。

3.2. 新しい説明の導入の仕方：「出来事」と「状況」の区別

本節では、前節で見た点過去と線過去に対する新たな説明方法を実際の授業にどのように導入するか、について述べてみたい。

前章で見た従来の点過去と線過去の説明方法の問題点を踏まえながら、この新たな説明一点過去は過去における「出来事」を示し、線過去は過去における「状況」を示すという説明一を導入する際の最大のポイントは、学習者に日本語の「出来事」と「状況」が示す意味の違いをいかに認識させるかにある。そのための方策として、本稿は、学習者たちにスペイン語の点過去・線過去の文を扱う前に、日本語で「出来事」と「状況」の区別を練習させることを提案したい。例えば、筆者は教室で、以下のような日本語文を、過去における「出来事」と「状況」を区別するための練習問題として学習者に提示している。

(24) 次の文のうち「出来事」はどれでしょう。また、「状況」はどれでしょう。

- (a) 昨日大きな地震がありました。そのとき、私は家にいました。
- (b) 私が生まれたとき、母は25歳でした。
- (c) 昨日私は7時に起きた。そして、8時半に大学に着いた。
- (d) 私が子供の頃、私の家族は東京に引っ越しました。

(a)では「大きな地震がありました」が「出来事」、「私は家にいました」が「状況」、(b)では「私が生まれた」が「出来事」、「母は25歳でした」が「状況」、(c)では「私は7時に起きた」「8時半に大学に着いた」の両方が「出来事」、そして(d)では「私が子供の頃」が「状況」で「私の家族は東京に引っ越しました」が「出来事」に相当する。これまでの筆者の経験では、担当する学習者のほとんどが上記の日本語文の「出来事」と「状況」を正しく指摘することができた。このことは、少なくとも成人の日本人学習者にとって、「出来事」と「状況」という用語の理解はそれほど難しくないと示していると考えられる。本稿の提案する新しい説明では、以上のような日本語による「出来事」と「状況」の区別の練習を経た後、点過去と線過去の用法をそれぞれ説明していくことになる。

3.3. 点過去を過去の「出来事」として説明する際のポイント

点過去を過去の「出来事」として説明する際のポイントは、過去の「出来事」とは「発話時」から見た過去に「何が起こったか」「何をしたか」を示すことである、ということを学習者に的確に理解させることにある。

まず、点過去が「発話時」から見た過去を示すということは、点過去が *ayer* 「昨日」、*hace tres años* 「(今から) 3年前」といった直示的な時の副詞句と共に起ると同時に、*hacia tres años* 「その3年前」といった非直示的な時の副詞句とは共起しない、という事実につながる。従って、この点を学習者に理解させるためには、発話時基準の副詞句を伴った練習問題を用意するとよいだろう。

また、点過去が「出来事」を示すという指摘は、それが当該事態の未成立から成立への「変化」を示すということであるが、この点を学習者に理解させるためには、例えば、自身の誕生から現在まで(例えば、大学入学まで)の履歴書を作成させたり、前日の自身の行動を時間ごとに記述させるといった練習問題が考えられる。いずれにしても、点過去は「発話時」から見た「出来事」を示すという説明は、「出来事」とは何かということを事前に身につけた学習者にとっては理解しやすいものとなる。

3.4. 線過去を過去の「状況」として説明する際のポイント

線過去は、まず点過去が過去の「出来事」を示す時制形式であることを確実に身につけた後に導入するのが望ましい。というのも、線過去の示す過去の「状況」は、既定の過去時空間の「状況」のことであり、この既定の過去時は点過去の示す過去の「出来事」によって確定されることが多いからである¹⁹。そして、そのように点過去の用法の練習を十分行なった後、線過去を過去の「状況」として説明する際のポイントは、まず、線過去の示す「状況」とは、現在時制が示す指示対象の「属性」「状態」等と基本的には同じものであり、両者の違いは問題となる時空間の違いに過ぎない—現在時制は発話時空間における指示対象の「属性」「状態」を示すのに対し、線過去は既定の過去

時空間における指示対象の「属性」「状態」を示す—ということを学習者に再確認させることにあ
る。そのために有効なのは、線過去に特有の「時制の一致」を利用した練習問題である。

いわゆる「時制の一致」とは、以下のように、主動詞が過去²⁰の直接話法で現在時制だった従属
動詞が、間接話法に転換されるのに際して線過去に変わる現象であるが、この話法の転換の練習を
繰り返すことにより、学習者は現在時制と線過去の相関関係を身につけることができる。

- (25) a. María dijo: “Estoy (現在) muy cansada.” → María dijo que estaba (imp.) muy
cansada. マリアは「私はとっても疲れてるの」と言った。
b. María dijo: “Soy (現在) de Madrid.” → María dijo que era (imp.) de Madrid.
マリアは「私はマドリーの出身です」と言った。
c. María dijo: “Estudio (現在) una hora en casa todos los días.”
→María dijo que estudiaba (imp.) una hora en casa todos los días.
マリアは「私毎日1時間家で勉強するの」と言った。

(25) は、指示対象の発話時空間における「状態」「属性」「(ポテンシャルな) 習慣」を表す現
在時制が話法の転換に伴う「時制の一致」の結果、線過去に変わったことを示したものである。こ
れらの例を見れば、線過去に特有とされた「過去の継続 (状態)」「過去の習慣」等の用法が、現在
時制の示す「発話時空間の継続 (状態)」「発話時空間の習慣」等が主動詞の表す既定の過去時空間
にシフトしただけである、ことが明らかとなろう。

ところで、2.1.では、以下の例のように、線過去が時間的限定性を示す副詞句と共に起すのを見
た。

- (26) (=14) a. ?Durante tres años él vivía (imp.) en Madrid.
3年間彼はマドリーに住んでいた。
a'. Durante los tres años de la guerra él vivía (imp.) en Madrid. (山村
1999:14)
その戦争の3年間彼はマドリーに住んでいた。
b. Hasta hace poco vivieron (ps.)/vivían (imp.) en Pamplona. (Westfall
1995:230) 少し前まで彼らはパンプローナに住んでいた。

このような例は、線過去を「時間的限定性」の表出に関与しないものとする説にとっては都合の
悪いものであったが、本稿が提案する説明にとっては問題にならない。というのも、本稿の説明に
従うならば、これらの例では、「時間的限定性」を示す副詞句が線過去の出現に不可欠な「既定の
過去時空間P」となり、当該の線過去はこの過去時空間Pにおける指示対象の「属性」「状態」を
表出する、と解釈されることになるからである²¹。

同様に、本稿の提案する説明は、線過去を「時間的限定性」の表出に関与しないものとする見解
がうまく説明できなかった、発話時における当該事態の無効を示す線過去の用法をも簡単に説明す
ることができる。

- (27) (=15) a. ¿ Sois felices ? --- Lo éramos (imp.). (Pero ya no lo somos.) (Sándor
2006:51)

あなたたち幸せ? --- [幸せ] だった。(私たちはもうそうではない。)

- b. ¿ Por qué no asististe ayer a las clases ? ---Porque estaba (imp.) enfermo.
(Pero ya no lo estoy.) (Ibid.)

あんたなぜ昨日授業でなかったの? ---だって病気だったから。(でももう病気ではない。)

- c. Pedro era (imp.) rubio de pequeño. (Arche 2006:2)

ペドロはこどもの頃金髪だった。

(27a) において線過去が使用されたのは、発話時空間の「状況」(発話時空間の指示対象の「属性」)と過去の時空間の「状況」(過去の時空間の指示対象の「属性」)が対照されたからに他ならない。もしこの例において線過去の代わりに点過去が使用されたならば、発話時空間の「状況」とは無関係に当該事態が「生起」したことを示すことになり、結果的に、文脈に合わないちぐはぐな文ができあがってしまう。一方、(27b) において線過去が使用されたのは、前文の点過去が示す事態が「生起」した時空間における指示対象の「状態」を示しているからであり、(27c) で線過去が出現したのも、それが de pequeño 「こどもの頃」が示す時空間における指示対象の「属性」を示しているからである。

3.5. 「出来事」と「状況」に基づく説明の応用：テキストにおける点過去と線過去

本稿が提案する点過去と線過去の説明は、両時制がテキストの中で示す機能の解説にも有効である。

スペイン語圏で出版されたスペイン語の中・上級者向け教科書を見ると、点過去と線過去が小説の地の文において示す機能、いわゆるテキストにおける両時制形式の機能に触れたものが少なくない。それらによれば、点過去は当該テキストの「本筋」を示し、線過去はテキストの「背景描写」になると言う。従来、このような点過去と線過去のテキスト内の機能は、これらの時制の基本的機能とは直接の関係なしに扱われてきたように思われる。しかし、テキスト内であろうとなかろうと、同じ時制形式が使用される限り、その機能には何らかの共通性があると考えべきではなかろうか。そういう意味において、本稿が提案する点過去と線過去の説明は、当該時制形式がテキスト内で見せる機能をも説明することができる点で有効性が高い。すなわち、点過去が示す過去の「出来事」はテキストの中ではその「本筋」となるのが普通であり、また線過去が示す過去の「状況」はまさにテキストの「背景」に等しい、ということは学習者にとっては理解しやすい一般常識なのである。

4. まとめと残された課題

以上、最近10年の間に出版されたスペイン語の教科書の中で点過去と線過去がどのように説明されてきたかを実証的に検討した。そして、そこで得られた結果をもとに、従来の日本人学習者に対する点過去と線過去の説明の問題点を指摘し、それらを改善するための新たな方策として、点過去は過去の「出来事」を示し、線過去は過去の「状況」を示す、とする説明を提案した。この新たな説明は、前章で示したように、これまでの説がうまく処理できなかった点過去と線過去の用法を、簡単かつ分かりやすく解説できるという点で効果的だと思われる。しかしながら、本稿で提案した説明にも解決すべき問題がある。

本稿が提案した新たな説明にとって重要なのは、先にも述べたように、学習者たちに「出来事」と「状況」を正しく認識させるという点である。そのために、筆者はスペイン語の点過去と線過去

を扱う前に、日本語で「出来事」と「状況」の区別の練習をすることを学習者たちに課すことにしているのだが、その結果を見ると、学習者が共通にその判断を迷う一連の事態があることが分かる。例えば、以下のような例である。

- (28) (= (21)) 映画どうだった? ---最高だった。¿Qué tal la película? --- *Era (imp.)/ Fue (ps.) fenomenal.
 (29) (= (23)) 今日は大変な雨降りだが、昨日はいい天気だった。
 Hoy llueve mucho, pero ayer *hacía (imp.)/ hizo (ps.) buen tiempo.
 (30) (= (22)) 東京に着くと、いい天気だった。Cuando llegué a Tokio, hacía (imp.)/ *hizo (ps.) buen tiempo.

(28) は映画を観に行った感想を述べる文で点過去が使用されている例である。当該の点過去は *ser fenomenal* 「最高だ」という形容動詞に適用されているが、このような日本語の形容詞文、形容動詞文を「出来事」として理解するのは日本人学習者にとっては大変困難なようである。その理由は、日本語の形容詞文、形容動詞文は通常静態動詞と解釈され、「変化」や「動作」を示す動態動詞ほど簡単に「出来事」という概念と結びつかないからだと思われる。しかし、ここで繫辞動詞 *ser* の点過去が出現したのは、鑑賞した映画を *fenomenal* 「最高だ」と話し手が評価したからであり、スペイン語ではこの話し手の評価の成立という事態そのものが「出来事」として捉えられるのである。また、(29) は天気の良い悪いを述べる文で点過去が使用された例であるが、このような事態が「出来事」として認識されるのも日本人学習者には理解しにくいようである。それは、天気や天候の文は (30) のように、ある「出来事」が生じた際の「状況」として述べられることが多いためと考えられる²⁾。しかし、スペイン語では、今日の天気と比較して前日の天気がどうであったかを話し手が評価・判断したのであれば、それは話し手の評価・判断の成立と見なされ、点過去が使用される。

このように、スペイン語では客観的な、話し手が自分の目で確認できる「出来事」以外に、話し手の心のうちで起こる主観的な評価・判断も「出来事」として認識され、点過去で表出される。それに対して、日本語では、話し手の評価・判断を示す形容詞文や名詞述語文の過去形には「した」という一形式しか存在しないためか、それらが動的な「出来事」として認識されるのは難しい。日本語を母語とする学習者に点過去と線過去の用法を正しく教授するためには、このスペイン語における「出来事」の捉え方と日本語における「出来事」の捉え方の違いに、いかに正しく学習者の注意を向けさせるかにあるように思う。

注

* 本稿は2007年9月8日茨木市男女共生センター WAM で開催された関西スペイン語教授法ワークショップ (TADESKA) において発表した「日本語母語話者のための点過去と線過去の教え方をめぐって」の内容に加筆・修正したものである。当日貴重なご意見を下さった方々に記して謝意を表したい。

1 Cf. 国立国語研究所 (1994, 1997, 2000).

2 Cf. 和佐敦子 (2001), 上田博人 (2002), 福嶋教隆 (2002), 上田博人 (2002).

- 3 しかしながら、数は少ないもののスペイン語文法教育における時制についての研究がないわけではない。西川 (2005) はそのひとつである。
- 4 以下、本稿で扱う形式はすべて直説法単純形の活用形式である。なお、本稿で言及した「勉強する」の現在形の活用形は次のとおり。現在形：1 人称単数 estudio, 2 人称単数 estudias, 3 人称単数 estudia, 1 人称複数 estudiamos, 2 人称複数 estudiáis, 3 人称複数 estudian.
- 5 スペイン語の過去形 2 形式の名称は、日本語のみならずスペイン語自体においても定まっていない。本稿は、現在日本で出版されているスペイン語教科書でもっとも使用されている名称を用いることにした。なお、本稿で用いる「点過去形」とは、スペイン語で pretérito perfecto simple あるいは pretérito indefinido と呼ばれるもの、また、「線過去形」とはスペイン語で pretérito imperfecto と呼ばれるものを指す。また、本稿で言及した「勉強する」の点過去形と線過去形の活用は次のとおりである。点過去形：1 人称単数 estudié, 2 人称単数 estudiaste, 3 人称単数 estudió, 1 人称複数 estudiamos, 2 人称複数 estudiasteis, 3 人称複数 estudiaron. 線過去形：1 人称単数 estudiaba, 2 人称単数 estudiabas, 3 人称単数 estudiaba, 1 人称複数 estudiábamos, 2 人称複数 estudiabais, 3 人称複数 estudiaban.
- 6 このことは関西スペイン語教授法ワークショップ (TADESKA) がスペイン語時制の教授上の問題点を問うたアンケート結果にも見てとれる。多くの回答が、日本人学習者にとって最も習得が難しい時制として点過去と線過去の 2 つをあげ、また、教師自身にとって説明するのが難しい時制としてもこれら 2 時制形式があげられていたからである。
- 7 この点において、線過去形でしか表出されない *so*ler 「～するのが常である」は極めて稀な例外である。また、本文中の「点過去と線過去は原則的にすべての動詞に適用される時制である」は、当該動詞自体が点過去と線過去の両方で表出されることを述べたものであり、当該動詞を含む事態 (命題) そのものの点過去あるいは線過去による表出を問題にしているのではないことを断っておきたい。当該事態 (命題) の点過去と線過去による表出については、山村 (1998, 2003a) を参照されたい。
- 8 以下、点過去の動詞活用は下線とともに pretérito perfecto simple の略である ps. で、線過去の動詞活用は下線とともに pretérito imperfecto の略である imp. で示す。また、例文は出典が示されていない限り筆者の作成したものである。
- 9 (10) は (8b) の副詞 *aquella tarde* 「あの午後」を *de joven* 「若い頃」に置換したものである。(8b) において imp. による表出が非文になるのは、*aquella tarde* が示す時間的インターバルの中で *bailar vals*es durante dos horas 「2 時間ワルツを踊る」という事態が「習慣」と見なされるのは困難だからと思われる。
- 10 例えば、点過去と線過去の機能的差異を「時間関係的」なものとして解釈する研究者は、これら二形式の間にアスペクト対立を認めないことが多く、また、点過去と線過去の違いを「アスペクト的」な対立とする研究者の中には、両形式の間にある時間関係的な違いは、結局、アスペクト対立に還元可能と考えるものがある。Cf. García Fernández & Camus Bergareche (2004).
- 11 調査対象となった教科書 39 冊は本稿の最後に記載してある。
- 12 今回の調査では、1 冊の教科書の中に複数のキーワードが出現した例があったが、それらはみな関連するキーワードとして数えていった。
- 13 実際、とりわけ時間的限定性の有無では説明しにくい線過去の表現 (例えば、時刻表現や本文中の「～がこども/学生だったとき」等) については、固定表現として提示している教科書も

少なくない。

14 Cf. 工藤 (1995).

15 「していた」に対応するスペイン語をすべて線過去にしてしまうという間違いは、実際、日本人学習者において頻繁に確認されるものである。

16 実際、TADESKA のアンケート結果によれば、線過去と過去進行形の区別、過去進行形に見られる線過去と点過去の区別は、スペイン語教師にとってもっとも説明に窮する項目のひとつのようである。

17 これは、例えば、点過去は *hace tres años* 「3年前」のような直示的な副詞句と共起しても、*hacia tres años* 「その3年前」のような非直示的な副詞句とは共起できない、ということを示す。

18 つまり、その時間構造に終結点を持つ *telic* 事態の点過去による表出は必然的にその事態の終了を示すことになるが、その時間構造に開始点があっても終結点は持たない *atelic* 事態の点過去による表出は専らその事態の生起を示すだけであり、その終結は時間限定を示す副詞等によって示されるということである。

19 しかし、この既定の過去時空間は必ずしも点過去によって確定されるわけではない。それは、時の副詞句（例えば、*entonces* 「そのとき」*en aquellos tiempos* 「その当時」*de joven* 「子供の頃」等）や何らかの文脈によって示されることもある。

20 時制の一致を引き起こす主動詞の「過去」時制として、点過去、線過去、過去完了があげられる。なお、現在完了は、時制の一致を引き起こすこともあれば引き起こさないこともあるため、一義的に「過去」時制と見なすわけにはいかない。

21 (26a)において線過去による表出が困難なのは、裸の名詞句からなる *durante tres años* は単に時間的インターバルを示すだけで、線過去の表出に不可欠な「既定の過去時空間 P」を示すわけではないからであろう。*durante tres años* が「過去時空間 P」の設定に関与しないのは、例えば、この副詞句が *Durante tres años él vivirá* (未来) *en Madrid*. 「3年間彼はマドリーに住むだろう」のように未来時制と共起できることから明らかである。

22 しかしながら、天気・天候を表す事態がみな同じように「出来事」として理解されにくいわけなのではない。例えば、「昨日雨が降った」という事態は、学習者のほとんどに「出来事」として理解される。問題になるのは、天気・天候の中でも、「天気が良かった・悪かった」「風があった」「風が強かった」「暑かった・寒かった」のように、「した」形しか持たない形容詞あるいは名詞述語文である。

参 考 文 献

- Arche, M^a J. (2006): *Individuals in Time: Tense, aspect and the individual/stage distinction*, Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Doiz-Bienzobas, A. (1995): *The preterite and the imperfect in Spanish past situation vs. past viewpoint*, UMI Dissertaion Services.
- García Fernández, L. (1998): *El aspecto gramatical en la conjugación*, Madrid: Arco/Libros, S.L.
- García Fernández, L. & B.Camus Bergareche (2004) : *El pretérito imperfecto*, Madrid:

Gredos.

- Guitart, J.M.(1978): “Aspects of Spanish aspect: A new look at the preterit/imperfect distinction”, in Suñer, M. (ed.) *Contemporary Studies in Romance Linguistics*, pp.132-168, Washington D.C.:Georgetown University Press.
- Sándor, L.(2006): *Tiempo para practicar los pasados*, Madrid: Edelsa.
- Westfall, R.E.(1995): *Simple and Progressive Forms of the Spanish Past Tense System: A Semantic and Pragmatic Study in Viewpoint Contrast*, UMI Dissertation Services.
- 上田博人 (2001): 「日本語とスペイン語の使役性の比較」生越直樹 (編)『シリーズ言語科学 4 対照言語学』, pp.51-73.
- 工藤真由美 (1995): 『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現』ひつじ書房.
- 国立国語研究所 (1994): 『日本語とスペイン語(1)』
- (1997): 『日本語とスペイン語(2)』
- (2000): 『日本語とスペイン語(3)』
- 西川喬 (2005): 「ser 動詞に見られる直説法点過去と線過去の使い分け—語学調査から見た学習上の問題点」『より良いスペイン語教育をめざして』(神戸市外国語大学外国学研究65), pp.89-115.
- 福嶋教隆 (2002): 「スペイン語と日本語のモダリティ対照」『日本語学』21-2, pp.68-76.
- 山村ひろみ (1996): 「canté/cantaba のアスペクト対立に基づく解釈をめぐって」*HISPANICA* 40 (日本イスパニヤ学会発行), pp.48-62.
- (1998): 「pretérito による表出のための条件—無生主語文の場合」『言語文化論究』No.9, pp.185-207.
- (1999): 「スペイン語の imperfecto と時間的限定性」『言語文化論究』No.10, pp.11-32.
- (2003a): 「スペイン語の ser コピュラ文における pretérito perfecto simple による表出と pretérito imperfecto による表出」『テンスとアスペクト—日・英・仏・西語の観点から—』言文叢書Ⅷ (九州大学大学院言語文化研究院発行), pp.1-46.
- (2003b): 「日本語の「タ」とスペイン語におけるその対応形式について—日本語の名詞述語文とスペイン語におけるその対応形式を中心として—」『言語文化論究』No.18, pp.129-153.
- 和佐敦子 (2001): 「日本語とスペイン語の可能性判断を表す副詞—疑問文との共起をめぐって」『言語研究』120, pp.67-88.

参照した教科書

- アルマラス, M、トレナド, P、その他 (2003): 『プラサ・マヨール』朝日出版社,
- 青木文夫・辻光博 (2004): 『新版・現代スペイン語: 文法と表現』芸林書房.
- 飯野昭夫 (2000): 『第2 語学のスペイン語』第三書房.
- 石崎優子 (2004): 『新版 続・スペイン語世界の窓』芸林書房.
- 糸魚川美樹、二村久則、三戸博之 (2001): 『ミラ』同学社.
- 上田博人 (1997): 『初級スペイン語 学習ガイド』朝日出版社.
- 上野勝広 (2006): 『新世紀のスペイン語』同学社.
- 江澤照美 (2003): 『パン ア パン』同学社.

- 大岩勉、パボン, C、高橋覚二 (2001) : 『はじめて学ぶスペイン語』 第三書房.
- 小川雅美編著 (2007) : 『スペイン語ワークブック』 同学社.
- ガルシア, P、トレナド, P、その他 (2005) : 『プラサ・マヨールII』 朝日出版社.
- 小池和良 (2002) : 『多国籍スペイン語』 同学社.
- 小池和良、上野勝広 (2004) : 『太郎と学ぶスペイン語—マドリッド編』 朝日出版社.
- 小林一宏、アマート, E. (2000) : 『スペイン語との出会い』 第三書房.
- 佐々木克実 (2003) : 『新・スペイン語との出会い』 芸林書房.
- 佐藤玖美子 (2001) : 『新・何を話しましょうか』 芸林書房.
- ジュステ・ジョルディ、坂東省次 (2003) : 『日本人のための役に立つスペイン語』 朝日出版社.
- 高橋覚二 (2000) : 『きりとるテスト10分間でスペイン語』 第三書房.
- 高橋覚二 (2004) : 『表現で覚えるスペイン語』 同学社.
- 東京大学スペイン語部会編 (2000) : 『CD-ROM で学ぶ初級スペイン語』 朝日出版社.
- ドメネック, L、その他. (1999) : 『META 自然に身につくスペイン語』 芸林書房.
- 中岡省治、沖原雅美 (2002) : 『スペイン語文法の基礎』 同学社.
- 中岡省治、長谷川信弥、バスケス・ソラノ, C.A. (2005) : 『スペイン語への架け橋』 白水社.
- 中川清、児玉悦子 (2005) : 『皆のスペイン語』 弘学社.
- 西川喬 (2001) : 『新スペイン語ゼミナール』 第三書房.
- 西川喬 (2004) : 『やさしくくわしいスペイン語の基礎』 第三書房.
- 西川喬 (2006) : 『さあ始めようスペイン語』 同学社.
- 坂東省次、仲井邦佳、太田靖子、エレナ・ガジェゴ (2002) : 『コミュニケーションのためのスペイン語』 第三書房.
- 坂東省次、中川節子 (2006) : 『スペイン語のABC』 第三書房.
- 福嶋教隆 (2000) : 『コミュニケーションのためのスペイン語』 芸林書房.
- 福嶋教隆 (2005) : 『生き生きスペイン語』 朝日出版社.
- 淵上英二、ロベス, A. (2001) : 『確認して進むスペイン語』 朝日出版社.
- 堀田英夫 (2003) : 『現代感覚で覚えるスペイン語のエッセンス』 朝日出版社.
- 三木、近藤、片倉、坂東 (2001) : 『スペイン語は、今』 同学社.
- 村上由利子、ファルコフ・S. (2006) : 『スペイン語シャワー』 同学社.
- 山崎真次 (2003) : 『ラテンアメリカ散歩』 芸林書房.
- 山崎信三 (2004) : 『スペイン語玉手箱』 同学社.
- 山道佳子、マルティネス・アストゥディヨ, J.M. (2004) : 『スペイン語でお願いします』 同学社.
- 吉川ギジェルモ、淵上英二 (1999) : 『わかるスペイン語入門』 芸林書房.